

## 答 辞

琉球大学大学院教育学研究科 専門職学位  
課程 の修了を迎えるにあたり、修了生を代  
表してご挨拶を申し上げます。

この一年、世界中が新型コロナウイルスに  
翻弄され、当たり前が当たり前でないことに  
気づかされることとなりました。本日の修了  
式についても開催そのものが危ぶまれました。  
このような中、西田 睦 学長をはじめ、諸先  
生方ならびにご来賓の皆様のご臨席を賜り、  
このように盛大に開催していただきましたこ  
とを心より深く感謝申し上げます。

入学以来、わたしたちはそれぞれの指導教  
員をはじめとする諸先生方の指導を仰ぎ研究  
を進めて参りました。しかしながら、それは平

坦な道のりではありませんでした。無事に今日の日を迎えることができたのは、ひとえに琉球大学大学院と、そこで出会えた大切な仲間や家族のおかげであると感じております。

私は教職十二年目にして、現職教員大学院生として本学で学ぶ機会を与えられました。

在籍中は勤務校に支えられ、研究を進めて参りました。勤務校が抱える学校課題は私自身の課題でもありました。教師にとって児童理解は大変不可欠なものです。児童理解が上手くいかなくなったとき、未来ある素晴らしき子ども達の健やかな成長を支えることができないと考え、私は教職大学院の門を叩きました。

一年目は、勤務せず大学院生としての生活を100%与えて頂きました。学ぶことに集中できた一年間でした。とはいえ、レポートに

追われゆとりのない中、院生同士でお互いに  
そのできなさを励まし合い、支え合ったこと  
も今となっては、貴重な笑い話となりました。

二年目は、現場に戻り教師と学生の二足の  
わらじを履くことになりました。

その生活は時間的には多忙を極めました  
が、子ども達と居る教室での実践と、担当教員と  
いる研究室での学びは二層構造をなして、こ  
れまで経験したことのない有意義な時間でし  
た。

研究を始めるにあたり、「「解」のない問いに  
挑む」という言葉を先生方から頂きました。私  
たちはこれから、今まで考えたこともない時  
代を生きていかなければなりません。いわば  
“解のない問題に向き合い、最善解を選び出  
していく能力が求められる時代です。

今まで考えたこともない時代を生きるため  
にそれでも、「解を自分で探し求め続けていく

こと」が私に課せられた研究だと考えました。

私は、小学校通常学級で、自閉症スペクトラム児と他者との関係性をいかに育てていくかを研究して参りました。誰もが経験のある係活動という場面を舞台に、自閉症スペクトラム児と担任である私が、その子の興味を中核に据え置き活動を展開していきます。その過程で、私という他者への信頼が生まれ、複数の他者との関係性の形成へと繋がっていききました。

私の研究はある子ども一人についての研究です。このような一事例を積み重ねた研究が現場で子どもと共に学び続ける私たち教師にとって重要だと気づかされました。

今後、実践家として一事例ずつ丁寧に積み重ねる研究を進めて参ります。

私たち修了生は、この春からそれぞれの新

たな目標に向かって歩み始めます。

コロナ禍が明けれることを願ひ、これまでと違う日常の中で迎える春です。

予測が困難な未来に対して今私たちができることは何かを問いながら、本大学院で学んだことを糧とし、社会に貢献できる人材となるよう努力して参ります。

結びに、本琉球大学のさらなる発展と本日ここにお集まりいただいた皆様方のご健康とご活躍を祈念申し上げ、答辞と致します。

令和三年三月二十三日

修了生代表

教育学研究科 照屋由紀子